
Epitaph

彩人

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Epitaph

【Nコード】

N43080

【作者名】

彩人

【あらすじ】

逝く間際に思ふこと。

Epitaph

それは、名残。

僅かに残る自尊心を掲げ、彼は告げる。

自分がしてきた事が間違いだとしても、他の誰に受け入れられなくても、自分の信じたものを信じ続け生きられたことは幸せだと…。

彼は笑い、人は自然眼を逸らして歩きだす。

それでも良かった。望んだものは何もない。

望まなければ失うものもないのだと、彼はずっとそう思っていた。それが間違いだとは気付きもせず。

望めば確かに失うものも多い。それでも、例え手にしていたモノがその掌から零れ落ちたとて、掌には載せることの出来ない思いや記憶は残る。それこそが“大切”なのだ気付かなかった。

否、気付きたくなくて目を逸らしていただけに過ぎないのかも知れない。

それはとても彼を臆病にさせた。

人を求め、人を信じ、その先に待つものが何なのか―それが彼を変えてしまう事が怖かった。そうして気が付けば、彼は独りになつていた。

挨拶を交わす人も、そっと触れてくれる人も、彼に話しかける者もない。

ここに居るのに、ここに存在しない自分が哀しかった。

彼は墓標を残す。

自分自身の為に言葉を残す。

それはとても滑稽に見えて、それでいて虚しくもあった。

ペンを持たない彼の手には墨の代りに赤が映え、白く染まる息の色だけが彼の体温を伝えた。

白く染まる世界に人はまばら、もう何度となく見てきた世界も今日で終わるのならば名残も尽きぬというものか。

寒さに凍える針葉樹は鮮やかな衣を全て取られ今にも泣き出しそうに揺れている。空に流るる雲はいつにもまして速く往く。冷たくひび割れた大地には植物の息吹を感じる事さえ出来ない。それでも、彼はこの世界が好きだった。

誰もが自分から眼を背けても、酷く罵られ唾を吐き捨てられたとしても、彼にはこの世界を憎む道理などなかった。

泣きだした空はいつもと違う。

昨夜は冷たい雨粒を零していた灰色の空が流すのは、白く汚れのない雪。

どうしてだろう。

もう幾分も流した覚えのないものが、目頭を熱くさせ次第に流る。自分の犯した数々の過ちを、罪を流すは白い雪。これが散り逝く者への饒だと言うのなら、こんな幸福なことはない。

—ありがとう—

誰に告げればいいのか分からずに彼は空に向かって微笑んだ。

その心は穏やかで、とても静かな物だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4308o/>

Epitaph

2010年10月21日14時33分発行